

ニュースパークリニューアル記念シンポジウム  
「大災害に備えて——災害時に新聞発行を継続するために」

東日本大震災から5年を経て、大地震が熊本を襲った。災害時に新聞はライフラインとして、人々に正確、的確な情報を提供し、評価を高めた。しかし、災害への備えには課題も多い。シンポジウムでは、震災を経験した新聞2社の代表者にいかに新聞発行を続けたのか、そこからどのような教訓を学んだかを対談形式で語っていただく。第2部のパネル討議では、いつ起きてもおかしくない災害に備え、平時にどのような取り組みをすべきか、発生した直後に新聞発行を継続していくために何が必要なのかを議論していただく。

- 【日 時】10月28日(金) 13:00～16:15  
【場 所】ニュースパーク2階 イベントルーム (定員70人)  
【対 象】新聞社、新聞関連メーカー (博物館特別会員に限る)

◇当日のスケジュール

12:40 開場

13:00～14:20

第1部＝対談「大災害と新聞発行——ライフラインとしての役割を果たすために(仮)」

発災時、どのような困難があり、特に心を砕いたことは何か。どのように苦境を乗り越え、新聞を発行し続けたか。東日本大震災、熊本地震でそれぞれ大きな被害を受けた河北新報社の一力社長、熊本日日新聞社の河村社長に対談していただく。災害時に再認識された新聞の役割・価値、部数や広告への影響と回復に向けた取り組み、新聞社が考えなければならない震災の教訓や今なお残る問題についても話し合う。

【登壇者】

河北新報社代表取締役社長 一力雅彦氏 熊本日日新聞社代表取締役社長 河村邦比兎氏

【司会】日本マス・コミュニケーション学会会長 大石裕氏 (慶應義塾大学法学部教授)

14:35～16:15 (質疑応答 10分)

第2部＝パネル討議「編集現場はどう災害と向き合ったか(仮)」

災害に際して、新聞社はどのような取材体制・指揮系統をとったのか。混乱する中、災害現場の取材で何を最も重視し、どんな困難があったのか。東日本大震災の前にも何度か大きな地震に見舞われた東北、大きな地震の発生はほとんど想定されていなかった熊本、しばしば豪雨災害に見舞われる広島。それぞれ状況が異なる被災地の地元紙の担当者が意見を交わす。合わせて、災害報道の反省点、災害で被害を最小限にするため平時にどのような報道をするかについても討議する。

【登壇者】

河北新報社防災・教育室長 武田真一氏 (東日本大震災時の報道部長)

中国新聞社報道部県警キャップ・久保田剛氏 (広島土砂災害時の災害取材臨時支局長)

熊本日日新聞社社会部次長・奥村国彦氏

【司会】専修大学文学部人文ジャーナリズム学科教授 藤森研氏

以 上